

● はしがき ●

前著『実は知らない 英文法の真相75』（プレイス刊）は、おかげさまで大学受験生はもちろん、社会人、そして高等学校や予備校の先生方からも多くのご好評をいただきました。同時に「ぜひ続編を」という声も多数いただきまして、今回は「真相読解版」という形でお届けすることになりました。

英文読解の場合も（いや、むしろ読解こそ）英文法の理解や認識の不足に起因する誤読、勘違いが多々見られる分野です。

ところが、インターネットの普及により、これまで以上に読み書きの力が求められ、今こそ骨のある英文をきちんと読む力が求められているのに、世の中は「実用英語」や「コミュニケーション英語」とやらがもてはやされており、日本の英語教育は相変わらず、いや昔以上の「迷走状態」にあるといわざるを得ません。

実用英語 ☞ ネイティブとすらすら会話できる（かつこいい！）もの
 受験英語 ☞ カビの生えた、古臭い、国際社会で通用しない時代遅れのもの
 （「訳読式の英文解釈」はその最たるもの！）

このようなイメージを漠然と持っている方も多いのではないのでしょうか？

❖「コミュニケーション」＝「英会話」？

中学校の英語教科書の中には、“For here or to go?” などというファーストフードの店員のセリフが最初にくるものもあります。これが to 不定詞の基本概念（これから先のこと）を教えるための例文というならまだしも（それでも、例文として適切かどうかは別の問題ですが）、これを覚えて英会話（ごっこ）のようなことをするのが実用的な「コミュニケーション」英語と思われている方がいらっしゃったら、そのような方にぜひ聞きたいのです。

英文読解とは「コミュニケーション」ではないのでしょうか？

英文を読み、そこに書かれた考えや主張・内容理解することは、読者と書き手との立派な「コミュニケーション」であるはずですが。

上っ面だけのブームに流され、英文読解の正体を見失ってしまう人が大量にいるからこそ、「英語難民」が絶えないのではないかと思います。

そもそも、ネイティブスピーカーとゲームをやって「楽しかった、でも...何も残らなかった」というような、いわば「会話ゴッコ」に終始するようなものこそ、勉強の本質を履き違えている——これこそ、むしろ時代に逆行するものではないのでしょうか？

❖「受験英語脳」からの脱却を目指して

仮に「受験英語」なるものがあるとすれば、それは英語そのものではなく、英語に対する取り組み方にあるのです。

ただ闇雲に形だけを追いかけ、中身（意味）を考えずに「公式」をあてはめるだけで日本語らしきものをつくるのは解釈ではなく、ただの置き換えであり、考えることを放棄した、まさにそれこそが「受験英語脳」といえます。

本書で取り上げるのは、英文読解の最高峰といえる——上っ面の丸暗記では通用しない、油断すると間違えてしまうポイントを含む——英文のみです。

英語が少々できると思い込んでいたが、実はどっぷり「受験脳」になっている方々には、冷や水を浴びせられるものもかなり含まれていると思われれます。それどころか、鼻っ柱を折られることがあるかもしれません。逆にいえば、本書に収録された問題を、一つ残らず間違えることなく理解できるようなら、まさに骨太の最高峰の読解力が身についていると考えていいでしょう。

本書により、みなさんが、社会人であれ、大学生であれ、また大学受験生であれ、英語の奥深さや、面白さを感じていただければ、この上ない喜びです。

2009年12月

佐藤ヒロシ